武者小路実篤とトルストイ（その三）

阿部軍治

10　作品の中におけるトルストイ

武者小路は明治四一年四月最初の本『荒野』（警醒社書店）を自費出版したが、その中に収録された諸作品にはトルストイの影響が色濃く現れていた。それらはトルストイズムの影響が濃厚な習作的な著作であったために、武者小路は生前には決してその再版をしなかったし、許さなかったことはよく知られている。

例えば、その中の短編『彼』（四〇年六月執筆）では、語り手の友人「彼」は悪友にさそわれて遊興にふけり、ついに若い芸妓（雛妓）を金で買い関係をもつことになるが、それを〝強姦〟と感じ、自分を〝大罪人〟と受けとめ、はげしく懺悔し、罪をあがなうために（彼女を愛するようになったためでもあるが）、家族や周囲の反対を押し切って彼女と結婚し、芸者のその母親ともども田舎に引っ越し、百姓のまねごとをしながら生活するようになるのである。これは言うまでもなく『復活』そっくりの筋立てであり、「彼」はネフリュードフの役柄を、もっともかなり短絡化され

たそれではあるが、相当忠実に演じていると言える。しかも、作品の中では主人公は自分をネフリュードフになぞらえ、「・・・マスロワ即ち彼女、ネフリユドフ即ち僕と、心に叫んだ。マスロワと彼女とは比していゝと信ずるが、ネフリユドフ！自分は自分をネフリユドフに平気で比する事が出来るか。自分はネフリユドフのやうになりたいと思ふ、なれない事はないと思ふ。しかし自分はネ氏よりも心から堕落してゐる、ネ氏の人格は自分より高い。しかし自分は少なくもネ氏のマスロワに対する処置を真似しやうと思つた。さうしなければならないと思つた。・・・」（小学館版全集、第一巻一二頁）、こう語っているのである。かなり稚拙な模倣であり、作品としては取り上げる値打ちもあまりないと思われるが、とにかくトルストイの影響が先ず最初に濃厚に現れた作ではあったのだ。

その他『荒野』に収録された幾つかの論文の中にトルストイの名前が散見されるのである。論文「人間の価値」（四〇年六月）ではこのロシア作家について「現今生存せる最も偉大なる人とされてゐるレオ、トルストイ」と述べ、また論文「正義の力」（四〇年七月）では、「吾人は、革命ストライキによつて、正義の律法の世に行はれ得るに至るべしとは信ぜず。・・・暴力によつて暴力に対するの可を認むる能はず。悪に克ち得べきものは善あるのみ」などと、無抵抗主義的、トルストイ主義的なことを述べている（同第一巻四四、四九頁）。

大正三年一月に書かれた戯曲『Aと運命』はきわめて自伝的な作品である。主人公Aは当時の作者の悩みをそのまま代弁していると見ることができる。彼は人生の岐路に立ち、運命が道を示してくれるのを、運命から呼出し（招命）があるのを期待し待ち受けている。Aは自分は運命から選ばれ大きな使命を果たすべく定められていると考えているのだが、それはいまだ開示されないのである。しかし、周りの人々はそれをAのひとりよがりだと思っている。そこで彼は運命が早く訪れ、大きな仕事を与えてくれることを願っているけれども、運命の方はまだ時が来ていないし、それにAが自分の力で、努力してそれを獲得せねばならない、と突き放す。作品の中にはA'なる人物が登場するが、それはAの分身であり、AとA'両方で一人の人物を構成していると見ることができる。A'はAの発言をたえずチェッ

クしたり反論するが、いわば一人物内でバフチンの言うダイヤローグが交わされているようになっているのである。

ところでこの戯曲の中には一見してトルストイだと分かる人物Tがとつぜん登場する。生き方に迷ったAはTに向かって、助言を求めて「師よ！」と呼びかける。すると、相手はこう応ずる。「私はあなたの師ではない。私は誰もの師ではない。私は自分の教への通りに生きることの出来なかつた人間だ。皆私のことを偽善者のやうなことを云ふ。東洋の一人の小さい男迄、私のことを針の穴をぬけやうとする駱駝に譬へた。私は出来ないことをしやうとしたか。さうではない。私はしないではゐられないことをしやうとした。私はもつと生きてゐても自分のしやうと思ふことは出来なかつたかも知れない。しかし私はしなければならないことをしやうとした。誰でも私を非難することは出来る。私も私をたへず非難した。しかし私はしなければならない唯一のことをしやうとした」（小学館全集第二巻二三〇頁）。

これだけのことを言うとTは行かねばならないと言って立ち去るのである。この後に「私はあんな尊い人を非難した」というAの後悔の弁が続く。非難そのものは間違っているとは思わないのだが、まだ真理を見いださない未熟な身で尊き人を非難したことを恥じて、誤るためにあとを追って行くのである。そして、ここにある「東洋の一人の小さい男迄、私のことを針の穴をぬけやうとする駱駝に譬へた」という文言は、要求の厳しいトルストイの当時の武者小路の捉え方を如実に表わしおり、「しなければならない唯一のことをしやうとした」とはそのような条件下での彼のトルストイへの弁明でもあるのだ。

戯曲『未能力者の仲間』（大正四年二月執筆）の主人公の先生は三二、三歳と記され、作者自身と同年代で彼を代弁する人物であると思われるが、これがまたある種のトルストイアンであると見ることができる。彼は戦争に大反対で、自分の周囲に集まってくる人たちに人類の立場に立ち、愛と憐れみを行うことを説く。彼はトルストイによって悔悟したこと、その教えを生きる指針としていること、自覚のもとになったのは「トルストイの本」であったことについてこう述べるのである。

「トルストイの本をよんで自分がかうして生きてゐるのが罪人のやうな気がしました。善事が出来るのに善事をしないのは罪悪だと云ふことが強く頭にこびりつきました。他人の不幸が自分の責任のやうな気がしました。自分の一言一行が不合理な他人を不幸にする法則の下に行はれてゐる気がしました。かうやつて私達は呑気に生活してゐるのは、他人が過重な労働を強ひられてゐるからだと云ふことを心の底から感じたのです。私は自分の生活が恥かしいものだと云ふことを知つたのです。」（小学館全集第二巻一八二頁）

かくして先生は一応トルストイの教えをわがものとし、彼を師としている者たちに同じ様な教えを説く。彼の中には愛の実行、敵への愛、非暴力、心内に神の王国を見ることなど、トルストイ主義の多くがある。「私達は暴力の上にはたちません。しかし愛の上には立つ時がありさうです」（一九四頁）という。そして、ここには自己完成についての言葉もある。「しかし自分の今出来る務めは知つてゐます。それは自分を正しき人間にすることです。さうして正しき人間の心が正しく私の心の内に自己の姿を見ることが出来るやうに務めることです。今の日本には正しき心をうつす鏡がありません。・・・私はその鏡になりたいと思つてゐるのです」と先生は言うのである（同第二巻一八五頁）。

しかしながら、先生のトルストイ主義の中身はかなり変形したものになっており、トルストイの教えを文字通りに実行することはできずに、愛せる範囲で愛し、また戦争には反対だが召集されれば戦地へ行ったらいいと語るのである。そして彼は立ち上がる時宜が到来するのを、修業しつつ待つべきであると考えるのだ。彼の立場は、雛鳥が成長して自ら殻を割って卵から出てくるように、あくまで無理をせず自然に振る舞うべしというものなのだ。「・・・すべての方面からある理想に向つて力がはり切つてくるのを私は待つてゐるのです。・・・神の国をこの世に建てると云ふことは自己表現の最終の目的です。なぜかと云ふのに神の国は皆の心のうちにあるのですから」（一八三頁）。これらの言葉にはじきに訪れる新しい村建設に向けての志向（心構え）が感じ取られるであろう。

武者小路は「『向日葵』あとがき」に未能力者の仲間とは「他人や自己の運命に就てのよりあつまり」であり、「よ

きことをしたいと云ふ意志を感じながら、その力のない」「或意味で今の人類は未能力者」(1)であると思うとしている。戯曲の先生は自分を慕って周りに集まっている若い人たち、真剣に人類の不幸をわが身に感じ、できるならそれをなくしたいと望んでいる人たちを、先生は「未能力者」と呼んでいる。つまりは彼らは将来的にはそのような理想実現のために働く能力があると思われている人たちなのである。先生はどこかに理想郷をつくること、正しき心の国を建てることを夢見ているのである(2)。

『向日葵』に収録の戯曲『悪夢』(執筆一五年八月)の主人公の若者は、有名な文豪を父親としているが、その父親は国家主義が全盛の時代に国家主義は人類の意志に反している、国家の暴力が届かない国を建てたい、などという主義を唱道したために、青年たちを懦弱にするものだとして多くの人々から非難され、息子の若者もその父の計らいで出会い愛し合うようになった少女との仲をそれが原因で相手の父親によって引き裂かれてしまう。その後戯曲の舞台は仙界に移る。そこで若者は仙人の計らいでひとりの少女に紹介され、お互いに愛し合って結ばれ、子供までもうけるが、仙人に少女の命は三年、自分も近く召集されて出征し、四、五年の命と告げられる。彼の父親はふたりを哀れに思い、仙人に息子を救うよう嘆願すると、仙人はそのためには父親が例の主義を捨てねばならないと語るのである。だが、父はどうしても主義を捨てることはできないし、息子もそれを望まない、そして彼は「敵の弱味につけこんで得をしやうと云ふどん欲な戦争」(小学館全集第二巻二八五頁)に行くことを運命として受け入れるのである。これらを見れば、この戯曲の主想を貫いているのはトルストイ主義そのものであることが明瞭であるし、反国家主義、非暴力、反戦を唱える父親はトルストイその人のようにさえ思える。若者も父親の主張に共鳴しているし、「私は敵の人もなるべく生かさうと思つてゐます。憎むわけにはゆきませんから、ですが、ある力には抵抗出来ないで、突喊する時は突喊し、切りあふ時は切りあふかも知れませんが、それは私の気が狂つた時のことです。おちついてゐる時は憎みはしません。・・・私は殺される瞬間にも笑つてゐたいと思ひます」(改訂版第三幕、同巻二九一頁)と、一種の無抵

抗主義のようなことを語っているのである。

上述したように、戯曲『ある青年の夢』（執筆一六年一～一〇月）は反軍国、反戦的な思想に貫かれていて、登場人物のひとりの亡霊五は、明らかに日本の戦争政策などを非難して、「南亜の戦争は英国の恥ぢです。青島の戦争はJ国の恥ぢです。・・・朝鮮にたいするJ国のやり方も僭越です」と語り、「他国を属国にし、或は亡国にする、換言すると他国民を亡国の民にすると云ふことは恥づべきことです。我々はその為に戦ふことは人類の意志にそむく、恥づべきことです」（小学館全集第二巻五一三頁）と述べるのである。

ここには武者小路の高いヒューマニズムの精神がいかんなく現れていよう。また、かつて徳富蘆花は政府の朝鮮属国政策に加担した兄蘇峰をはげしく批判したが、国の植民地的な政策に対する蘆花と実篤の相い似た対処の仕方に、両者の思想の近似性を見ることができるであろう。

大正六年執筆の短編『ある父』も武者小路の自伝的な作品である。ある父はさる学校の歴史の先生で、家族には妻の外に旧制高校の息子がひとりあった。実は結婚後三年間留学したのだが、その間に女道楽して病気をもらって帰国し、妻にもそれがうつり、たぶんそのために上のふたりの子供は育たなかったのだった。家族構成などは違うが、父親の道楽のために先に生まれた上の子供たちが育たなかったという設定は、全く武者小路自身の家族の伝記そのものではある。学生になった息子は学校へ通う途中によく出会う女学生に恋い心を抱くようになる。彼はお互いに顔は知り、会釈ぐらいは交わすようになっているが、まだ名前も知らないその娘さんを真剣に愛するようになり、結婚をしようと考える。そして息子はそのことを手紙で親に打ち明ける。親の方も基本的にはそれに賛成し、人を介して調べたところ、娘は一七、八歳と思ったのに、まだたったの数えの一五歳にすぎず、結婚には早すぎることが判明する。息子は彼女への愛のなかで生きているが、とつぜん彼女は死んでしまう。当然息子の悲しみは限りなく、よく泣いていた。この間息子は初めは政治家になることを目指し法科を選ぶが、次第に文学書を熱心に読むようになり、彼女の

死後には、彼に机の上にはよくバイブルや「トルストイの論文」がのるようになる。そして、彼はとうとう「一か八か文学をやつて見やう」と思うようになるのだ（小学館全集第三巻二七七頁）。

「・・・僕は創作家は指揮官か、少くも旗手か、ラッパ手だと思つてゐる。人間の心のより処にならなければつまらない。人間に生甲斐を与へるにはどうしなければならないと云ふことを直接に感じて、人間の心をその方に惹きつける役目をしなければ馬鹿気てゐる。さう云ふ役目をした創作家が自分にはなつかしい。ユーゴーだつてトルストイだつて、読んだ人は読まない人の知らない良心を呼びさまされる。其処に愛が生まれるのだ。さう云ふ仕事が出来る可能性がなければ誰が文学なんかやるものか」（同第三巻二七九頁）。

こうして息子は法科から方向転換して文科を目指すようになるが、やがて大学へ行くことも無駄と考えて退学し、文学に専念するようになるのである。改めて説明するまでもないが、この辺の事情は武者小路自身の生き方をそのまま描いたものであることは明きらかであろう。そのためか彼自身この短編には愛着があったらしく、「『AとB』と『ある父』は自分の本道を歩いてゐる作だと思ふ」とも語っているのである(3)。

実篤の民話におけるトルストイ

武者小路の三篇の民話もその内容も精神も実にトルストイ的であると言える。「かちかち山」ではずるく恩を仇で返す狸は最後には善意の代表で賢いうさぎによって退治される。悪は善によって滅ぼされるのである。とりわけ「花咲爺（はなさかじい）」はトルストイ主義的な民話である(4)。そこでは正直で善意の正兵衛（正直爺）は強欲と偽りのかたまりである隣の欲兵衛にねたまれ、何かと責められるが、ひたすら善意と正直のみをもってそれとたたかい、勝利するのである。正兵衛は欲兵衛が意地悪で嘘つきであり、彼を憎み、これまでも何度もひどい目にあわされてきたにもかかわず、相手の頼み（無心）を快く聞き入れて犬も臼も貸してやる。彼はまたいわば徹底した無抵抗主義者でもある。彼は犬を殺されても相手を怒りもしないばかりか、「・・・つい自分の方でわるいことをしないと云ふ自惚（うぬぼれ）があると人を信用し

たくなるものですからね。徳が足りないくせに自分の徳に自惚れるのがよくないのですね。しかし之も修業ですよ。おかげで少しづゝ修業をつんでゆきますよ」(5)、こう反省しているのである。正兵衛は欲兵衛に大事な臼を割られ、くってかかられても、決して腹を立てず、逆に彼の代わりに立腹する中兵衛を宥める。また、最後に欲兵衛が嘘をついたために殿様に処刑されそうになると、これほど彼を害してきた相手のために殿様に助命を願うのである。これはいわば、右の頬を打たれながら、左の頬を差し出すたぐいの行為ととることができるであろう。

しかし、この民話を単にトルストイ的無抵抗主義的作品として書き上げたのでないことについて、武者小路はこう述べるのである。「トルストイだつたらこの話を随分トルストイらしくして深いものをかくであろう。自分は無抵抗主義的方面よりも、与へられた運命をいかに注意深かく生かさうとしたかに興味をもつて書いて見た」(「花咲爺に就て」小学館全集第三巻二三五頁)。この場合「与へられた運命」とは無抵抗主義的な生き方だと思うが、とにかくこの民話の主眼が無抵抗主義というよりも天から与えられた運命に忠実に生きる様を描くことにあったというところに武者小路らしさが現れているわけである。もっとも、運命に従順に生きる様を描いた民話がトルストイのもとにないわけでもないであろう。

11　武者小路と徳富蘆花

武者小路が若い頃同時代の日本人で尊敬していたのは、夏目漱石、島崎藤村、国木田独歩、内村鑑三、徳富蘆花(武者小路は彼をいつも蘆花生と読んでいた)、木下尚江、高山樗牛などであった(全集第三巻一八六頁)。

青年時代に彼は特に『自然と人生』『思ひ出の記』『黒潮』などを愛読していたので、蘆花には特に深い関心をよせていた。戦後彼は「一時的ではあつたが、蘆花生の時代があつたと言つていゝと思ふ」と書いている(6)。当然、蘆花の

トルストイ訪問は彼に「大なる興味」を呼び起こしたのだった。一九〇六年三月二〇日の日記に内村氏と蘆花について言及し、こう書いている。「吾人は内村の愛を疑ひしが、今や氏の信仰より愛の勝れるを説けるを見、・・・尊敬の念おこりし程。／『信仰の愛』『パリサイ人とは誰ぞ』の如きは確かに氏の一歩進めるを見る。吾人は氏の猶一歩進みて、ト翁の如くならんことを願ふや切なり、それにしても蘆花、否徳富健次郎氏は如何せしや、知りたきは氏の消息である」（全集第二二巻一〇頁）。時あたかも蘆花が伊香保に籠もってトルストイに書簡を送り、ヤースナヤ・ポリャーナ訪問を決心して出発する二週間ほど前のことであった(7)。武者小路はこの時点ではまだ蘆花の順礼旅行のことは知らない。

その約一か月後、彼は新聞で当の蘆花のトルストイ訪問への旅立ちを知り、四月一九日こう書いている。「新聞を読んだら徳富健次郎氏が、エルサレムの古蹟を訪ひ、トルストイを訪問する為に洋行したと云ふのを見て、甚だ勢ひがついた」（第二二巻三三頁）。蘆花のトルストイ訪問は折しも彼が学習院の図書館からドイツ語の『トルストイ伝』を借りて筆写している時だったので、格別彼の関心を呼んだのだった。

武者小路は蘆花の帰国をじりじり待っていたと思われる。当然彼は後者が帰国時に発した発言や、じかに見たトルストイの印象などについて述べた新聞記事を読んだものと思われる。また、後者の講演内容に接し、更にはこの年の暮れに出版されたその旅行についての蘆花の『順礼紀行』を読んだものと思われる。そして、それから彼はトルストイについての話が聞きたくなり、とつぜん蘆花を訪問することを思い立ったのである。彼は予め手紙で問い合わせて、返書を得て訪問している。戦後彼自身が、それは「今の蘆花公園に引越される少し前だつたと思つてゐる。二度目には今の蘆花公園になつてゐるお家を訪ねたかと思つてゐる」(8)と書いている。そして、武者小路は明治四〇年（武者小路二二歳）正月三日に初めて蘆花を訪ねたのである。ということは、最初の訪問はまだ蘆花が千歳村粕谷へ引っ越す前だったので、青山の偶居だったことになる。

訪問は「蘆花生に逢ふのが目的と云ふよりも、トルストイの写真を見たり、話を聞いたりするのが目的だつた」。つまり、武者小路は蘆花の中に先ずはトルストイを見ていたのである。彼はこの時の話の内容は覚えていないが、「三時間許り、心置きなく話せた」「そして蘆花生の人のいゝのに厚意をもつた」のであった（全集第三巻一八六～一八九頁）。この頃の武者小路の考えは蘆花のそれにかなり近いものがあったと見なせると思うが、前者はしきりに自分は先輩をもつことは嫌いだと述べていて、この時も彼は自分のそのような考えを蘆花に前もって断っているのである。武者小路の徳富蘆花への関心は何よりも後者がトルストイに会ってきたからであったが、そのほかに、性格的にも文学的にも両者には共通するところがあり、それらの点からも引かれるところがあったのだと思われる。

ふたりとも次男で賢兄をもち、トルストイという共通の師をもち、曲がったことが嫌いで、わがままなところも似ている。思想的宗教的にもこの時期のふたりは近かったと見ていいであろう。蘆花はクリスチャンなのに対して武者小路は殆ど無宗教と言ってもいいほどだが、前者のそれはかなり自己流に解釈され直されたものであったし、後者の方は逆にキリスト教にかなり引かれていたと見ることができると思う。また、文学についても両者のそれは自伝的で、かつリアリスチック（事実的）であることを基本としていたのだ。もっとも、蘆花は自然描写や情景描写を得意にしたのに対して、武者小路の方にはそういうものはほとんどなく、周知の如く作品は主として対話から成り立っている。この点では両者の文学は決定的に違っていたのである。

武者小路はその後も東京郊外の粕谷に蘆花を何度も(9)訪れている。相手は彼をいつも気持ちよく迎えてくれ、帰りには街道筋まで見送ってくれるのだった。武者小路は蘆花の新しい生活を、よく〝美的百姓〟とも呼ばれたその半農的生活を美しいものと思ったのだった。この点では後年彼が〈新しき村〉を作る際になにがしかの影響を与えるものがあったと推測されよう。武者小路は二人はトルストイという共通の先生をもつほかに、「当時の宗教熱は彼等を同じ思想にした。・・・大事な処で彼等は同感を感じて話が出来た」と書いている（第三巻二一一頁）。武者小路は蘆花を

先輩として尊敬し、相手から好意をもたれていると思っていたので、自分の恋について打ち明けたり、他人の事柄についても相談したりしていたのである。

志賀直哉の日記によれば、明治四〇年九月三日、武者小路は彼のことで「ワザワザ蘆花氏を夜の道五里を歩いて行つてくれた」のだった。だが、相手は不在だった。そして、日を改めて九月二七日に、今度は武者小路と志賀のふたりがそろって中野を経て、昼頃に粕谷に蘆花を訪問した。この頃志賀は女中のC（千代）と恋愛関係にあり、結婚を決意したが、家族に反対されて非常に悩み、周辺の人によく相談をしていた。彼の師である内村鑑三にはふたりの関係は罪であると言われたのだった。この時蘆花は内村さんの言うように罪とは思わないけれども、今すぐ結婚するのは危険であるというアドバイスをしたのである(10)。

このように武者小路はこの頃蘆花を師と仰ぎ、話をきき、かなりインチメイトな事柄まで相談に持ち込んでいたのである。しかしながら、蘆花の態度に先輩顔が見え出すと嫌になり、次第に反感を抱くようにさえなる。明治四一年四月一七日にも、武者小路は蘆花を粕谷に訪ねている。これはこの春たぶん二度目の訪問だったと思われる。その日の日記に彼はこう記している。「午前徳富さんの所にゆく。昼飯をよばれた。しかし何となく話にくく、心と心の話が出来ず心地がわるかつた、早く家に帰りたかつた。徳富さんと自分との、人生に対する態度が違ふ様な気がし、それに先生として尊敬する義務が、二人の接近を非常にさまたげる。三時頃帰路につく」。この時は東京に用事があるという蘆花夫妻と共に帰って行くことになり、夫妻と一緒に何と甲州街道を新宿まで歩いたのである(夫人は人力車に乗って)。日記のその先に、「それからは話がはずんで時のたつのも知らず、新宿の停車場のそば迄来て別れた。その間は実に愉快だつた」(全集第二二巻六七頁)、彼はこう書いている。

しかし、それから十日ばかりした四月二八日、送付した『荒野』についての蘆花の返書が届くが、それに彼はひどく自尊心を傷つけられてしまったのである。蘆花は『荒野』は「若々しい青葉のやうな感じがするお坊ちやんの作で

あつて、『荒野』の感じはしない」と書いていたのである。それは当たってはいたが、弱点をずばり突いていたので耳がいたかったのだ。武者小路はそのことを日記にこう記している。「徳富さんから、『荒野』を読んだとハガキが来る。そのうちに〝お坊ちやまの作だ〟と云ふ意味の事が書いてあつた。実際さうだ、さうに違ひない。しかし自分はお坊ちやまの作と云はれるのが何よりつらい。急に淋しい気がした。（中略）しかし自分は徳富さんの考へと自分の考への異る事を益々知つた。さうして徳富さんに対して、昔ほども親しめないと思つた。さうして淋しく感じた」（全集第二巻八〇、八一頁、小学館全集第三巻二一八頁参照）。

一般に武者小路の処女出版『荒野』に対しては肯定的見方はごくわずかで、全く取り上げないか、取り上げても大半は蘆花と同じ様な否定的な見方であった。ある程度予想していた反応とはいえ、それに武者小路は非常に落胆したのだった。それに恋の方もうなく進まなかったので非常に落ち込むことになったのである。自分のやりたいことは新しい基礎の上に新しい家を建てることだと考え、「徳富さんのしたことは、旧き家をこはして其処に新しい家をたてようといふのだ」、中年の人の考えはみなこれと同じ考えだ、と彼は自分を慰めている。

そして、日が立つにつれて武者小路は蘆花に対する見方を変え、反感をつのらせて行った。第一に『荒野』に関する意見が不親切だったし、それにこれまでは個人的な相談事に親身になって対してくれていると思っていたのに、今になってみると、実はそうではなく、彼の目にはいい加減に扱われていたと思われるふしがあったからである。六月五日の日記に彼はこう書いている。「自分は此頃徳富さんに向つて何となくいゝ感じがしない。／・・・それは自分が余り徳富さんを、信用してゐたからかも知れない。実云ふと自分は始めから、徳富さんを尊敬してはゐなかつた。しかし真に自分の友の如くにしてくれるので喜んでゐた。この春二度徳富さんを訪問した。さうして二度とも徳富さんから自分を無価値なものの様に取扱はれた。自分の自負心を傷つけられた。／徳富さんが自分の恋を知つて心配してゐてくれると思つたら、徳富さんはまるで忘れてゐて、いゝかげんの返事をしてゐたのだ。・・・／この事は当然な事で

ある。しかし自分には不快だつた。・・・／自分には今でも徳富さんの真面目な愛のある、親切な人たる事を疑へない。しかし自分に対して他人よりも、親切にしてくれると思つてゐたのはあやまりだつた」（第二二巻一〇一頁）。武者小路の気持ちはゆれ動き、矛盾に満ちている。相手がこちらの思うように動いてくれないので、不愉快なのだ。だが、「さうして徳富さんに不快を持つてゐる自分の心に対して不快を持つてゐる」のである。彼はこれは自分のわがままでありまた相手のわがままでもあると思うのであった（一〇二頁）。

また『或る男』には、彼が蘆花が嫌うようになったのは、この春粕谷を訪れたとき、蘆花から、「自分達のやうに食ふことに困つたことのないものには文学の仕事は出来ない」というような話を聞かされたからであると書いている。その点に引け目を感じていたところをずばり言われたので、ひどく腹が立ち、二度と行くまいと思ったのだった（全集第三巻二一〇～二一二頁）。蘆花に反感をもつに至った経緯について彼はそれより十年ほど前に雑誌『白樺』に寄稿した「食ふことに」（『白樺時代の感想』に収録）の中でも同じ様なことを書いている。帰り路に「・・・腹が立つて来て仕方がなかつた。自分はそれから三月許り氏の言葉に反抗し氏に対して憎悪の念に燃えた。自分がクリンゲル好きになつたのはその時からだ。さうして未だに氏を軽蔑し、氏の為人のいゝことを知りながら憎悪の念をなくすることが出来なくなつてゐる」（全集第二三巻八二頁）。蘆花の「お坊ちゃま」「食ふことに困つたことのないもの」という言い方は武者小路の一番痛い処、触れてほしくないところをついていたので、彼は本当に腹を立て、憎しみを燃やしたのだった。そして、蘆花をトルストイに見立てていたかのように、蘆花への反感がそのままクリンゲル好みを誘因し、一定のトルストイ離れを引き起こしたのである。

最後にはこうして蘆花のもとへ行かなくなったのであるが、その後もふたりは相手を相当意識し合っていたと見える。日米関係が悪化した大正一三年夏の六～八月、徳富蘆花はその日米関係の問題に没頭し、九月に彼の編集で『太平洋を中にして』を出版したが、その執筆陣には、彼のほかに、内村鑑三、安部磯雄、柏木義円、横井時敬、賀川豊

彦、別所梅之助、それに武者小路実篤が名を連ねていた。アメリカが移民の排撃など反日政策に出ると、日本国内ではアメリカとの戦争を主張する主戦論が勢いを増してきていたが、蘆花らはそれに反対して立ち上がったのだった。武者小路も日米間に戦争が起こるのを恐れて、この年の『改造』七月号に戦争に反対する一文「米国と戦争ひがつてゐる人々を見て」を発表している。その中で彼はこう語っていた。「・・・今のまゝでゆけば米国と戦争はさけられない処に進んでゆくからかも知れない」、「どうしたつて今度戦争すれば、日本は経済的に破産し、革命が起つても、食ふ道がなくなるであらう。米騒動位ではすまなくなるであらう。／日本がいくら強さうな顔したつて、今の日本では米国と戦争するのは馬鹿気でゐるとしか思はれない」(11)。すると、蘆花はそれを読み、同好の士を得たことを喜び、日記に「十分ではないが、これも大切な加勢だ。武者はやはり可愛がらねばならぬ」(12)、こう記している。蘆花はかつて武者小路の作品を批判して以来仲が疎遠になっていたが、改めて彼を評価し直していたのだ。九月武者小路が徳富蘆花のこの問題に対する対応を評価する一文を書くと、蘆花は日記に「武者小路が不二に〝日米問題の解決〟をほめて居るさうな。武者さんからほめらるるは珍しい事だ」(12)と書いている。

晩年武者小路は蘆花についての思い出を綴ったエッセイ「蘆花生と私」を書き残している。ここには蘆花についての彼の総括的な考えが述べられていると思うので、その一部を次に引用しておこう。「・・・トルストイから僕が受けた影響が多すぎるので、その方面の蘆花生の思想上の影響はあまり感じなかったが、一時日本の良心として、内村鑑三と、蘆花生の存在は、我等にたのもしさを与へてくれたのは事実で、蘆花生の意見を我等が重く見て聞きたく思ったのは事実だ。所謂文壇とは別の世界の存在として、純文士としてはいく分継児あつかひされて居たが、依然として多くの読者を持ち、それ等の人の良心のより処になつて居たのはたしかだ」。蘆花について彼はこのように感謝の念を抱きつつ回想している(13)。

総じて、武者小路は徳富蘆花の中に性情的にも思想的にも非常に自分に近い人間を見ていたと見なすことができる。

二人とも大のトルストイびいきであり、その感化をこの上なく受けていたが、二人の考え方、思想にはかなり共通するものがあったであろう。そしてまた、武者小路は蘆花の中にかなりの程度トルストイを見ていたのであると見なすことができよう。武者小路は日記に「徳富さんも孤独な人である。自分も孤独な人である。徳富さんも我儘な人である。自分も我儘な人である」と書き、また、二人は同じ気質の人間だから嫌い合うのかもしれないと云いながら、他方では「しかし自分にはさう思へない」と揺れる心の内を語っている（第一二巻一〇二頁）。いずれにしろ、日本を代表する二人のトルストイアンには共通するもの、お互い引き合うものが少なくなかったと見ていいであろう。

12　評伝『トルストイ』の執筆

武者小路は昭和一一年四月評伝『トルストイ』（大日本雄弁会講談社）を発表している。彼はこの評伝執筆の主眼を、トルストイの著作の紹介や分析ではなく、人間トルストイを明らかにすること、トルストイとはどんな人間か、どんな思想をもち、どんな生活をしていたかを読者に伝えることに置いていた。このことは、武者小路はトルストイの中ではその思想や生き方により引かれていたことを再度例証していよう。彼は作家自身の日記や書簡、そして他の著者の伝記や所見を資料として、トルストイの生活を描き出しているのである。特に多く用いているのはこの作家についての伝記で、とりわけ最も詳しく定評のあるビリューコフ著、原久一郎訳の『大トルストイ伝』全三巻であった。そういう意味ではこの評伝には格別に目新しいものはない。しかし、作家武者小路の捉えたトルストイということでは興味深い。六百ページ近い相当長いトルストイ伝であり、執筆を約束してから書き上げるのに一年数カ月かかったと著者は述べている。そこにもこの仕事に対する作者の熱の入れ方がうかがわれよう。

トルストイ八二年の生涯のどの時期にもほぼ均等的にページをさき、この作家にまつわる重要事項をほぼ網羅して

いる。即ち、両親をなくしてのトルストイの幼年時代、カザンでの学生時代、創作に手を染めるまでの模索の時期、カフカスでの軍人生活、そして最初の創作の試みと成功等々を取り上げている。それらの中で特に全体からすると比較的に詳しめに紹介している箇所は、トルストイとツルゲーネフの関係、戯曲『闇の力』にまつわるエピソード、飢饉の際等のトルストイの社会活動、トルストイとソフィア夫人との関係、家出にまつわる事柄などをあげることができよう。

そして、武者小路はトルストイが若い時からたえず「自己完成」に心を注いでいたことに留意し、そのことを所々で述べている。周知のごとく若い頃武者小路は利己主義を主張したが、それは単なる利己主義ではなく、その中には自我の確立・自己深化が含まれていたわけであり、筆者はそれはトルストイの自己完成に通じるものがあったと見ることができると思っている。総じて、芸術家トルストイよりは、思想家、人道主義者トルストイに照明が当てられていると見ることができる。したがって、トルストイの作品の紹介や考察はきわめて少なく、文豪トルストイ、或いはトルストイの全体像を知るにはもの足りない印象を与える。それでもそれらの中の幾つかをここに紹介しておきたい。

『幼年時代』に関して米川正夫氏の評を引用し、どの人物もすばらしく描き出されているが、母親の描き方が十分でないという意見に同意しつつ、「・・・母の愛が十分かけてゐないと思へる。しかし他の人々は実によくかけて居、主人公の幼年の心理の変化や、空想なぞとても他の人には書けないやうに思ふ。／実際この作を読めば、この作者の描写力、想像力、観察力、空想、感情の動きなぞの非凡さを感じないわけにはゆかない。すべての人が生きてゐる（母は例外として）。そして子供の好奇心をもち、又感情の動きをもつて、あらゆるものが、観察され、描写されてゐる。そして子供の愛情や、羞恥や、その他感情の変化、心の動きなぞが実によくかけてゐる。この作一つで作者の天分のあることがわかるのは当然である。・・・一家の出来事が実に生々と、面白く、真実さをもつてかゝれてゐる」（『トルストイ』一一一頁）。

その先では家庭教師カルル・イヴァーノヴィチについての描写を引用して、「・・・実に表現が適確で、調子が張り切つてゐる。寸分のすきがない程充実してゐる。そして見方が平凡でなく、個性が強く生きてゐる。それで少しも都合よくものを見ず、真実さと、人々の生活がつかんである。・・・」こう述べている（一一二、三頁）。トルストイの芸術的技法はすでに日本文学界でも高い評価を受け、徳富蘆花など多くの作家たちに影響を与えていたが、武者小路はこの本ではここでこのロシア作家の技法に関してようやく具体的に記述し（あまり多くはないが）、しかるべく評価を見せてくれたのである。

日本を代表するトルストイアンであるふたりの文豪徳富蘆花と武者小路実篤は、両方ともいわばその師父について全く同名の著書『トルストイ』を書き残している。若い時書かれた前者の『トルストイ』はこのロシア作家の作品・芸術を主に紹介していたが(12)、壮年期に書かれた後者の『トルストイ』はその思想の紹介を主としていて、その点では両書は全く対照的であったのである。その違いはそのまま日本文学におけるふたりの文豪の文学の違いとして現れているし、それぞれの文学の特徴ともなっているとも考える。

さて、武者小路は『戦争と平和』に関してはかなりおおまかではあるがこんな書き方をしている。「・・・完全さでは『アンナ・カレニナ』にまけるであらう。だが内容の複雑さ、構想の大きさ、材料の広さ、調子の高さ、（作にいく分ムラはあるが）なぞでは最傑作と言つてもいゝかも知れない。『クロイツェル・ソナタ』は大きな滝のやうな作だ。其処にゆくと『戦争と平和』は大河のやうな作で、ある処なぞはその水量の大きさ、発展の仕方の広さにただただ感心するより他はない。（中略）／彼はこの小説であらゆるものを書かうとした。上流社会、社交、金、恋、自然、戦争、名誉、愛国、虚栄、忠義心、性欲、死、愛、民衆、軍隊、恐怖、勇気、等々々、又あらゆる性格、あらゆる種類の人間を書かうとした。／描写の美しさ、情熱の高さ、死とのいろ〳〵の取組み方。彼の関心を持つもの程、其処に複雑な真実さをもつて生きてくる」。このようにもとより武者小路はこの長編の構想、描写、人物などほとんどの点で非常に

感心したのであるが、それでもナポレオンの描き方などその内容面では欠点があると見ていた。「彼はナポレオンだけはあまりに軽蔑を示したがつた。勿論すぐれた描写の処もあるが、一面的の人間として切りかけてゐない処が多かつた、その他の人は主人公は勿論、一寸出てくる人でも男女とも実に生々とかけてゐる」。トルストイのナポレオンの描き方は一面的にすぎるという武者小路のこの批判は、むろん言を俟たないであろう。それにしても全体としては世界文学の傑作についての紹介と評価としては実に乏しくかつ寂しいところである。もっとも、いいにつけ悪いにつけ、これらはまたしても武者小路のトルストイ受容の主要な特徴はよく示す形になってはいよう。

また、彼はトルストイの英雄否定の歴史哲学には次のようにほぼ同感を示している。歴史というものは英雄によってつくり出されていくものではなく、「他の到底理解出来ない、いろ〳〵の小さい原因が積み重なつて起るもので、個人とか、英雄とか言ふものゝ歴史を動かす力は甚だ微弱なものだ」という歴史観に、「僕は全部とは同感出来ないが八九分は同感するものだ」、「・・・一人が何万人に命令すると言ふことも今の時代、殊に過去の時代にはあり得ない事とは僕には思へないが、しかし在来のやうに英雄を過重視することのなほ大きなあやまりなことは、トルストイの言ふ通りだと思ふ」（二七五〜二七八頁）。明治以来軍国主義的な風潮が強まって行く環境の中で生きながら、武者小路は時代風潮に迎合せず、どちらかというとそれらを批判的に見ていたと思うが、それにはトルストイの平和主義の感化がかなり与っていたと考えられるだろう。周知のように、彼は乃木将軍の自殺についても冷ややかな受けとめ方だったのである。

武者小路はトルストイの所謂転向後の活動と生き方を肯定的に捉える。彼はこの作家の精神的・宗教的な軌跡を辿って行き、トルストイが精神危機に陥り、自殺を企てかねないほど深刻に悩んだあと、宗教的な求道性を強め民衆のキリスト信仰の中にその救いを見い出して行ったことを総じて肯定的に捉えるのである。トルストイは『福音書』と民衆の信仰に救われた。彼はそこに真の信仰によって生きている人々を発見したのだ。他方では「外形的信仰の表示と、

敬信的儀式のうちに多くの虚偽」を見ないわけにはゆかなかった。「其処で彼は虚偽が洗ひおとされた真実な宗教を求め、又研究した。彼にとつてそれは生きる為だつた」。武者小路はまたトルストイの『懺悔』の中から次のような言葉を引用している。「私の信仰に導いたのは生の意義の探求だつた。即ち、人生の正路の探求、如何に生くべきかの探求だつた」(三二〇〜三二一頁)。

ここにはまた転向後のトルストイの精神状態を示す次のような日記が引用されている。「また一月以上も恐るべき心の苦しみを経験した。しかしそれは無益ではなかつた。若し神の善徳を愛するならば、・・・即、神の善徳に生きるならば――そしてその中に幸福を、生き効のある真の生活を見るならば、この肉体が真の善徳の妨げになつてゐる事実を汝は見るであらう。・・・刈り入れる者が汝に非ずして神なることを知つて、播け、播け、大いに播くがいゝ。前者が種を播き、後者が刈入れる。・・・汝が報酬を見ずに行ふこと、愛によつて行ふことが、まさしく神の善徳なのだ。――播け、播け、思ひきり播くがいゝ。神の善徳は成長する。刈入れるのは汝――人間――ではない。汝の中なる、種を播くものそのあるものなのだ」。これを引用した後、武者小路はこう語る。「トルストイのこの言葉は正しいが、しかし肉体が妨げになる方面許り見てゐるやうに思ふ。その妨げになる肉体は、病的な方面だけではないか。キリストの肉体、仏陀の肉体はそれを妨げなかつたと見ていゝのではないか。孔子、ソクラテス、又我が二宮尊徳も。トルストイは病的な方面も亦、多く持つてゐた！　がしかし刈入れるものに就ての彼の理解は深い」(三四二〜三四三頁)。武者小路にはトルストイを知った初めの頃から、この作家が余りに肉体や性欲を蔑視あるいは敵視しているという不満がつねにあったのである。

武者小路はトルストイと彼の影響を受けたコロニー建設者たちとの関わりについても書いている。後述するようにトルストイ自身はこのような運動に批判的であった。武者小路はトルストイの日記や書簡の中からこれについてのそのような批判的な意見を引用している。「共産制度への立て籠り、さうした制度の生活、さうした生活を純粋に保存し

ようといふ努力――これは何れも過誤であり、罪悪である」、彼らには「・・・俺達は他の一般の人々から見ると純潔な者だ、心を安じていゝのだと、斯うお手軽に考へたがる傾向があります・・・」。また、一五人で共同生活をしているA氏の共産村の場合、「・・・近郷の貧しい人々を助けながら、清らかな愛に充ちた生活をしてゐる。が唯一つあまり芳ばしくない事があります。他でもない、彼等の中の或る人々は、基督教の信者には自分達の共産村・・・に於ける生活以外に真の生活はないと考へ、あらゆる他の生活、例へば君や私の営んでゐるやうな生活では――我々は食人種に加担してゐるのだ――三十コペックの働きをして一ルーブルの食物を摂つてゐるのだと斯う考へ、それを口外してゐる事がそれです」。このコロニーは二、三年でつぶれたのであるが、トルストイはその理由について、「凡ての人とごつちやになつてのみ生きる事が出来る。聖者だけが一緒になつて生る事は出来ない」、と述べていた。これは当然武者小路たちの新しき村の運動にも関係がある問題なので、これに関しては彼はこう反論するのである。「しかし僕に言はすと、A一氏達は聖者でなかつたのだと言ひたい。そして聖者はこの地上に存在してゐる時は実に稀だと言ひたい。つぶれたのは彼等が俗人と共通なものを持つてゐたからだと言ひたい」(三九八、三九九頁)。

武者小路はトルストイを「本当の人間」「本来の人間」である、「決して我等が世間普通に見る、半分眠つてゐるやうな、或は自己をいつはり、かくしてゐるやうな人間ではないからだ」(五五九頁)、と述べる。トルストイは幼少にして両親を失ったにもかかわらず、彼の生命力は彼を自己に忠実な人間にした。「彼は実に正直に、自己を内部から生かすことが出来た。彼は一生を通じて、内部からの生命の声を聞き、その意志に従つて生きた」。トルストイは若い時には自己中心の人間だったが、『アンナ・カレーニナ』執筆の頃から自己本位の生活の空虚さをしみじみさとるようになった。彼は個人的本能を満足させることが出来たとき、それだけでは満足できないで、虚無感にぶっつかった。人類的本能が目覚めたのだ。我等を導くもの、生長させるものは、個人本位ではなく、人類本位なのだ(五六一、五六二頁)、こう武者小路はトルストイの精神的な生長を理解するのである。これはかなりの程度武者小路自身の精神的・人間的

な面についても言えることではなかったかと筆者は考えている。そしてここには大津山が書いている彼の〈人類主義〉と言われるものに通じるものがあったのではあるまいか。

本書の最後の方で武者小路はトルストイに対する自分の観方を次のように纏めている。「実際、彼は作家として稀に恵まれた男である。彼の内には常に書かないではゐられないものがあつた。彼は子供の時から過度に感じやすく、観察力が強く、想像力が無限で、心の動きが鋭く、感動が強く、反抗心、愛、怒、負け嫌ひ、それ等が人並以上に強く、又涙もろかつた。そして自づと表現力を持つてゐた」（五五六頁）。更にその先ではこう書いている。

「・・・彼はいつも、若い時から神を求め、宗教を要求し、正しい生活を求め、そして神意に吐ふ単純な生活に憧れをもつてゐた。それ以上、彼の性質のよさ、面白さ、豊富さ、自分はその彼の多種多様な性質と、生活に興味をもつものだが、しかし彼に、本当の悟りが来なかつたら、自分の彼にたいする尊敬はずつとへつてゐることゝ思ふ。・・・我等が彼に興味をもち、彼からいろ〳〵教へを受けたのは、彼が感じた、人生の空虚さと血みどろな戦ひをして、遂にはひ上つて来た人生の意義を、正当な姿で認めた点にあるのだ。その後の彼は基督の教へ通りに生きようとした。〝愛〟のみが人生の虚無に打ちかつ力をもつことを知つた。肉体を彼は信じなかつた。人間の精神を信じた。彼はこの世に苦しんでゐる多くの人を知り、その人々の生命の為に、根本から働きたいと思つた。そして彼は人々の生活の間違ひから、いろいろの不幸が起ることを知り、私有財産や、暴力の社会の病根であることを知つた。彼の社会に対する批判を僕は全部的に同感するものではない。しかしその根本をなしてゐる、〝愛〟には感心する。そして彼が自分の生活の不正からのがれて、正しい生活に入らうとした熱意には感心する。殊に人間のよさ、純粋さに感心する」（五六二、五六三頁）。

武者小路のトルストイに関する考えは部分的には変化が見られるが、ほぼこれが彼のトルストイについての最後的な見方だったと言うことができるであろう。その観察力の鋭さと表現力の豊かさ、感受性の強さと涙もろさ、それか

ら求道的で神意にかなった簡素な生活への憧憬、キリストの教えの無条件の実行、深い人間的な愛と気高さ、肉体よりも精神への過度の傾き、反私有性反権力、こういったものすべてはたしかにトルストイの芸術や思想の核心を成しているものではあった。

13　実篤と老翁の思想的な類似性

武者小路の物事の考え方や創作態度はトルストイに実によく似ている。トルストイはつねに真実を描くことをモットーとし、たとえそれが批評家たちや文壇、あるいは政府や教会などから批判されようとも、恐れることなく自分が真実と思うことを生涯語り、書き続けた。武者小路も太平洋戦争期を含めた昭和の不幸な軍国主義時代を除くなら、まさしくそのように、真実を求め、真実と思うところを語り、真実に生きようとしたと言えるだろう。

大正五年発表の彼の随想集のような著書『後ちに来る者に』（洛陽堂発行）には、そのような彼の考え・見地が随所に現れている。「本当の事」では彼はこう語る。

「本当の事をかゝなければならない。どんな不合理なことがあつても本当のことをかゝなければならない」。本当のことにふれることは恐ろしく、苦しいこともあるが、そうしなければならないという。「死刑を見てその本当の事を感じることの出来る人はトルストイやユゴーのやうな人間でなければ駄目だ。林檎の落ちることの本当のことを知るのはニュトンのやうな人でなければ駄目だ。本当の事はいたる処にあるが、我々の神経は過度の刺激を恐れて、本当のことを見る前に両眼を閉ぢてしまう。本当のことを何時迄も正視すると云ふことは容易なことではない。・・・／しかし我々は出来るだけ本当のことをかゝなければならないのである」（「本当の事」一五年九月、小学館全集第三巻四三一頁から引用）。

もっともこれに関してトルストイとの違いを言えば、建て前はこの通りであっても、武者小路自身、彼が残念ながらいつでもそうできたとは限らないという点にあった。「・・・かく云ふ自分もまだ〳〵本当の事を正視する事が耻かしい程弱いのである。・・・自分は勇んで本当のことを正視する男ではない、祈りの気持でなければ本当のことは正視することは出来ない。又自分は本当の事を正視する瞬間に恐怖を感じないことはない。さうしてすぐ顔をそむける」(同四三二頁)。しかし、彼は基本的には、特に作家たる者は「本当のことに目を閉ぢることは辱づべきことだ」(四三二頁)という考えを堅持していたと見ていいだろうと思う。

また、武者小路の「自然」理解もトルストイのそれにかなり近いか類似していたのである。彼は、「僕は神と云ふべきかはりに自然と云ふ言葉をつかうことが多い」と語る。つまり、彼は自然の中に神を見、自然の法則に従って生きるべきだと考える。「僕に云はすとこの世には自然以外のものは存在しないのだ。すべてのものは自然の法則に従つて存在してゐるのだ。無機物も、有機物も。星も砂も芥子粒も、人間も単細胞動物も。どれも自然の法則に従つて存在してゐる。人間もこの法則には背けない」(「自然と云ふ言葉」一六年二月、第三巻四三九頁)。すなわち、地球ばかりではなく宇宙全体が自然の範疇に入るのだし、その中の一員人間もその自然の一部であり、それに抱かれて存在しているのである。「自分は自然を崇拝する。自然の法則によつて生きられることを光栄にする。自然は神であり、自然は法律家であり、裁判官である」(四四〇頁)。たぶん、ここまではかなり一般的な自然理解であろう。だが、他方では武者小路は「自分は自分の一生をなるべく有意味にしたい本能を自然に与へられてゐる。自分はその本能をなるべく自然の法則に従つて満たしたく思つてゐる」(四三九頁)と考え、自己の本能をいわばかなり絶対視する独特な立場をとるようになっているということである。そしてここから、彼のマイナス面とプラス面とが、つまり、独善に陥る危険と独立独歩の強い見地をとる可能性が生まれてくると考えられるだろう。

武者小路は「個人がこの世に生れたと云ふことは偶然すぎる」と考える。「自分は元々、生れなかつた方が当然な人

間だ、しかし生れた以上は自分として生きてゆく、自分に与へられた運命のもとに自分を生かしてゆく」（「偶然者の独言」一九一五年一一月、第三巻四三六頁）。だからこの生を大事にし、可能な限り生かそうと考えるのだ。

「・・・死は涅槃であつて、涅槃は恐るべきものではなく、帰るが如く、大往生をとげるが如く死にたいと思つてゐる。死をいそぎもせず、死をおそれもせず、ゆく水がゆくやうに、川が海にそゝぎこむやうに往生したいと思つてゐる」（「理想的なこと」一九一六年七月、第三巻四七八）。武者小路は大正四、五年にはもう、自分の生も死も自然の行為として受け入れた達観したような境地に立っていたのだ。

武者小路は人間の分類をし、下から類別して、彼自身を含め多くの人々は、彼が「他人に喜びを与へたいくせに喜びを与へることの出来ない人」（「かゝる人は愛すべき人だ」と言う）と規定する「未能力者」に入れる。それに対しトルストイに関しては、「更に進んだ人は堕落することもないことはないが善事をも着々と実行してゆく人。五寸さがらうとも一尺のぼる人。トルストイなぞはこの仲間の内でも上位に位する」（「理想的なこと」四七九頁）と語るのである。そして、その上はキリストや釈迦で、孔子やソクラテスはその位階に踏み込んでいるともいう。

また、武者小路はその著書『トルストイ』の中にこのロシア作家について、「彼は年中すましてゐる道学者ではなく、むしろ自然人の一面」をもっていた（同書四二二頁）、「真理にたいする求道の至誠と、その真理の中に入りこまないとをさまれなかつた純情さは愛しないわけにはゆかない」（四三八頁）といった書き方をしているが、まさしくトルストイにはそのような一面があったと思うし、それは武者小路その人のものでもあったと考える。

14　トルストイの引力と彼への反発の狭間で

武者小路は自分に対するトルストイの作用について大正六年初めこう書いている。「自分はいろ〳〵の人から自分の

血や肉になるものをとりました。トルストイはその内の最初のものであり、最大のものであり、最強、最深のものです・・・・」。そして武者小路にとって、「トルストイは最もよき時に」来てくれた師だったのである。さもなければ、彼は「政治家になつて虚偽の上に虚偽な生活」を送る羽目になったかもしれなかったからである。あらゆる面において武者小路にとってトルストイは人生の師、導き手なのであった。「トルストイに審判されなければ、自分は現世の生活をそのまゝ認め」、他人の不幸を顧みない利己的な人間になっただろうとも彼は言う(15)。

しかしながら、武者小路には一般にトルストイに対する反発もあった。それというのも、トルストイの言うこと、トルストイの教えを実行することは彼には不可能に思われたからである。それに「自分はその教に生きるには自分の内の多くのものを殺し、その上に自分の生活が不安になり、常に不自由で臆病に生きなければならないやうな気が」したからであった。トルストイの著作には、そして、その誠実さや愛や人類の運命にたいする心配の深さには、大概いちいち感心しないではいられない、「しかし論文や『クロイチエル・ソナタ』はいきなり頭をつかまれてお前の生活は邪道な生活だ、生活をかへなければ人間ぢやないと云ふやうに云はれてゐる気がする」(16)というのが実篤の受け止め方であった。

また、『新しき村の生活』(新潮社大正七年刊行、小学館全集第一巻四二七頁参照)の「〝自己の為〟及び其他に就て」において武者小路は次のようなことを言っている。五、六年前にメーテルリンクの『智恵と運命』の中で「自己の如く隣人を愛すると云つたつて第一自己を愛することを知らなければ始まらない。又自己の如く隣人を愛するのでは未だたらぬ。他人の内の自己を愛するのでなければ」という言葉を読んだとき、自分にはそれが天啓のように響いたという。彼は「私がトルストイ主義に反抗しだしたのはこの時に始まつてゐるやうな気がしてゐます」(小学館全集第一巻四二七頁)と述べている。だとすると、このエッセーが執筆されたのは明治四五年一月であるから、彼のトルストイへの反抗は彼のこの作家への心酔のピークである三九年頃からすでに始まっていたことになるわけである。彼のト

ルストイ主義信奉というのも、全面的というわけではなかったということなのである。それから常に「自己の為」と云ふことを頭において行動しているし、そこに誰も知らなかつた「生命の道を見出しました」、と語っているのだ。彼はトルストイ主義の影響下にあつたことをこの時は「トルストイ主義にいぢめられ」ていたと表現しているのである。そして、自分が「自己の為」（一五二頁、全集第二三巻『白樺時代の感想』に採録八六頁）ということを今の程度に主張するようになった一因として、そのトルストイ主義にいじめらていたことをあげるのである。

彼は更に述べている。「トルストイの教は私に理性の価値を教へました。私はトルストイによつて自己の理性の権威と云ふものを知つたのでした。しかしトルストイは〝自己の力〟と云ふものを顧慮させることを忘れてゐます・・・。少くも私はトルストイの教によつて〝自己の力〟と云ふものを顧慮するのをさへ卑劣なことゝ思ふやうになりました。私は随分それで苦しみました。自分を随分罪人だと思つて苦しめました。その苦しさから私を救つたのは前に云つたメーテルリンクでした。私はメーテルリンクによつて〝自分の力〟だけのことをしなければいけないこと、さうして〝自分の力〟をだん〳〵養つてゆくこと、又〝自己〟と云ふものゝ深さのわからない代物だと云ふことを教へられました」（『新しき村の生活』一五四頁、全集第二三巻八六、八七頁）。トルストイの教えは人に罪の意識をもたせ、悔い改めを強いるようにとられることは事実であり、武者小路がそれに悩み、苦しみ、それから逃れるためにメーテルリンクに救いを求めたというのは十分に理解できる。従って、武者小路が学生時代のトルストイへの熱烈な心酔から時を経るにつれて次第にある程度距離を置くようになって行ったのはごくしぜんであったであろう(17)。

他方で武者小路は、トルストイから離れたきっかけはクリンゲル（の『貧窮』）に夢中になったことであったという意味のことを語っている。自分はかつて自分でも想像できないほどトルストイを崇拝していた。「しかしその時自分の力でトルストイを受け入れられるだけ受け入れたら、何だかトルストイを卒業した気がした。さうしてクリンゲルを崇拝した。・・・」（「自分の真価」小学館全集第一巻四二〇頁）。そして、彼はその後崇拝の対象がクリンゲルからロダ

ン、ロダンからゴッホへ移って行ったと述べている。しかしながら、筆者はこれをそのまま彼のトルストイ離反や卒業と受け取れないと考えている。それは文字通り「・・・卒業した気がした」のであり、実際はそうではなかったと思うからである。確かに武者小路はメーテルリンクやクリンゲルに熱中するようになってから、トルストイから一定の距離を置くようになり、それ以前の熱烈なトルストイ崇拝の熱はさめたが、以下に見るように絶えずトルストイを意識した言動をとっており、この時期には広い意味ではトルストイ離反や卒業とは見なし得ないのではないかと考えるからである。

ともあれ、一般に研究者たちによって武者小路がトルストイ離反あるいはトルストイ脱却を起こしたと見られている時期は一体いつ頃のことであったであろうか。本多秋五はその著書『「白樺」派の文学』においては武者小路のトルストイ離れの時期について明確には述べていない。ただその中で、「マーテルランクによってトルストイを卒業するとは、トルストイの〈理性〉を名として外部の世界に自由を伸張するのでなく、マーテルランクの〈智恵〉によつて内部の世界に自由を追ふことを意味してゐた」「トルストイからマーテルランクへの道は、武者小路では、クリンゲルの『貧窮』に寄せた感想から『桃色の室』にいたる道であつた」(18)と書き、そしてメーテルリンクを梃子にしてのトルストイ卒業の期は、戯曲『桃色の室』（『白樺』明治四四・二発表）後であると語っている。「・・・戯曲『桃色の室』・・・にいたつて、武者小路の脱皮の過程は完成してゐる」(18)。これはその後では自己脱皮という言葉で言い替えているが、要するに、それは武者小路のトルストイ的な利他愛からメーテルリンク的な自己肯定への転換であり、それをトルストイ主義の脱皮、それからの卒業、と氏は主張するわけである。

本多は他のところでもこの問題について同様の主旨の考えをこう述べている。武者小路がトルストイズムの影響が濃厚なその処女作『荒野』の再刻を生前には頑として許さなかったのは、「このトルストイズムを決然と脱却したときに武者小路実篤が生れたのであって、ここにあるのは武者小路以前の武者小路だとしたからであろう」(19)。

小田切進も大体同じように、上田敏に勧められたメーテルリンクの『智恵と運命』を梃子にして、武者小路のトルストイ脱却は起こったと述べている。氏はそれはむしろもっと早い時期に生じたとし、彼の日記の明治三九年の部分は「武者小路の強烈なトルストイ熱と、それからの脱出の、苦しい内面の葛藤をつづった貴重な文学的記録である。霊と肉の相剋に苦悩し、脱出の道は容易に見出すことが出来ないが、その苦闘の中から、明治四十一年の部分に徐々に形成されていった大きな転機がみちびきだされるのである」と見ている。氏は『お目出たき人』に見られるようなメーテルリンクの影響を受けて出てきた彼の強い〈自我〉の固執はまさしくそれを証左するものだと見るのである。「・・・こうした徹底したエゴの肯定、〈自我主義〉、或いは〈個性と個性の合奏〉という思想は、メーテルリンクの『智恵と運命』の一節が「天啓のやうに」ひらめいて・・・武者小路の着想が生まれたのである。これはもう完全なトルストイ主義の脱却である」(20)。氏はこう述べている。

たしかに「桃色の女」は「運命の許す限り自己を幸福にするのが人間唯一の務めです」(21)、自己の成長が先決であり、その前に他人のことを考えるのは生意気だと、自己確立、自己肯定を第一であると主張している(全集第一四巻二五、二九頁)。しかし以下のような理由から筆者は、このことは直ちにトルストイ離反、トルストイ主義の放棄を意味することにはならないと考えるがいかがであろうか。トルストイの主人公たち(例えば、アンドレイ・ボルコンスキー)も成長過程、自己確立の過程では利己主義を発揮することがあることを想起したいと思う。そして、トルストイ自身も若い時から絶えざる自己分析・省察などによって自己完成を志向していたが、武者小路のこのような生き方も一種の自己確立であり、彼流の、一種の形を変えた自己完成、その一過程であると見ることができないであろうか。

それに対して、武者小路研究家の大津山国夫は武者小路へのトルストイの影響、いわば武者小路のトルストイ時代を明治三七年から四〇年までの四年間としている(22)。

大津山は、武者小路は「精神の尊厳と人間の尊厳を、彼はトルストイからはじめて学んだ」と述べ(上掲書七二頁)、

また、「武者小路におけるトルストイは、〈社会主義とピューリタニズムの代名詞〉であった」（四一頁）とも言う。大津山はトルストイ時代の（トルストイヤン）武者小路の信条と生活に関して次の六項目をあげている。1、肉欲の否定、2、人間は愛によって結ばれるべきであるとの主張、3、田園生活の賛美、4、富貴が害悪であるとの主張、5、国家主義、軍国主義の否定と、個人主義の主張（反戦主義者トルストイに忠実に従おうとした）(23)、6、自分の寄生的生活を直視し、社会正義の実現のために献身せんとした姿勢（八七～九一頁）。これらはトルストイの教えの主要部分であり、このまま首肯していいであろう。

そして、氏は武者小路のトルストイ離れの時期をかなり明瞭に次のように述べるのである。「武者小路のなかでトルストイ離反の志向が目ざめ、やがてそれが彼の〈自然〉主義として確立する時期、すなわち明治四一年から大正二年までの六年間を、私は武者小路の第二期、「自然」の時代と考える」。「第二期はトルストイ離反の志向にはじまり、〈自然〉主義の確立によって終る」と氏は書く（上掲書一四一頁）。氏は、「それは〈自然〉によって創られたままに生きようとする主義であり、〈自然〉の命令と人為的な規範の要請が相剋するときには、前者に従おうとする主義であった」と述べる（上掲書一六〇頁）。（次の著書『武者小路実篤研究――実篤と新しき村――』［明治書院、一九九七年］においても、大津山はこの区分の仕方を若干は修正をしているが、だいたいは踏襲している）。氏は、これはトルストイ離反であり、トルストイを仮想敵とするものであったと見るのである。その理由として、彼の四一年の日記の中のトルストイ言及がたったの三回であったこと、また、禁欲主義的なトルストイに反発して、メーテルリンクの『智恵と運命』などを梃子として（触発されて）、自然を肯定し、本能、とりわけ性欲の肯定へ向かうようになったことなどを氏はあげている（一五〇頁）。「禁欲を要求するトルストイの至上命令に対抗する手段として、彼［武者小路］はこの〈自然〉の助けを借りようとした。〈自然〉をトルストイ以上のものとして規範化し、その命令のままに生きる…」ということであり、それは一言で言えば「憧憬の対象として価値化された、原規範としての自然である」と大津山は

述べる（上掲書二〇八、二〇九頁）。また、他方で氏は、武者小路の「自然」主義はしだいに「〈自然〉崇拝と反ヒューマニズムという二つの柱に定着」し、「前者は、トルストイの清浄たれ、本能を克服せよ、という内的要請にたいする抵抗であり、後者は、社会正義を実現せよ、愛せ、働け、という外的要請にたいする保留である」（同一四一頁）と見る。

この時期武者小路がトルストイに〝息苦しさ〟を感じて、そのようなトルストイに対して一定の距離を置いた、あるいは〝反抗〟するような形になったことはその通りであろう。しかし、他方ではそれがそのまま完全な〝トルストイ離れ〟にもトルストイからの独立にもなっていなかったことを見ないわけにはゆかないであろう。彼はトルストイに〝抵抗〟する一方で、たえずトルストイを意識し、思い、問題にしているのである。武者小路がトルストイに「自然」を対置し、それによって〝息苦しい〟トルストイ主義から逃れようとしたことについて、後年彼自らがこう述べている。「トルストイの言っていることにはたしかに真理がある。しかし肉体を有することにまた僕は人生の意味があると思い、トルストイは偉いが、自然はなお偉いと思わないわけにはゆかなかった。しかしそれはもう少しあとの話かもしれない」（『自分の歩いた道』一〇頁）、と。ちなみに、本多秋五は武者小路のこの時期を、「自然」主義に対して「自己」主義の時期（世界）と規定している（小学館全集第一巻七三六頁）。筆者はこれはトルストイとの決定的な決別ではなく、総体的にはその影響下にあるが、自己確立の時期、自己形成のためにそれが弱化した時期と見たいと考えたい。

たしかに大津山もあげている、四一年執筆の『お目出たき人』における「自分は女に餓ゑてゐる」、あるいは四二年の日記の「自分の霊も肉も彼女を恋ひしたつてゐる」（四・二七）といった言葉は、トルストイの教えとは正反対のものであり、その限りではトルストイ離反に見えないことはない。あるいは、四二年五月執筆の「自己の如く隣人を愛することが実行された時、吾人はうるさくてまゐるであらう」（『白樺』四三・七）といった発言は明らかに反トルスト

イ的なものではある。しかし筆者は、それらは完全な離反や卒業を意味するものではなく、大津山が別の処で語るように、まだその試み、「トルストイ主義の武者小路的転生」の模索（一四五頁）と見るべきではあるまいか。それというのも、他方では、彼はその後もまだトルストイを強く意識し、その影響下にあると思われる言動をたびたび繰り返しているからである。このことを大津山自身もまた、これはトルストイの呪縛から逃れようとした「トルストイ離反」であって、自分がそれを「トルストイ卒業とか、トルストイ脱却とか」言わない所以である、と語っている（一四三頁）。「トルストイ離反は、新しいトルストイ主義、トルストイ主義の武者小路的転生を完遂するための一階梯であった。・・・トルストイの要請に主体的にこたえるために、一度はその呪縛から脱出しなければならなかったのである。反ヒューマニズムの強行が擬態であったように、トルストイ離反も擬態であったといってよい」（一七九頁）と氏は結論づけている。

そうだとすれば、これはもはや離反と呼ぶべきものではなく、自己確立のためのトルストイへの反発、子が親に対してとるような自立のための反抗であったということではなかったのか。筆者はこの時期にはまだ武者小路には本当のトルストイ脱却も離反のなかったと考えたいが、いかがであろうか。ただトルストイへの対し方がいくぶんか変わり、いわばトルストイのすべてを肯定する熱狂的なトルストイ心酔に替わり、この作家へのより自立的主体的な傾倒に変わったのだと考えたい。それは変形されたトルストイ主義であり、大津山の言う〝武者小路的転生〟〝新しいトルストイ主義〟であったのだ、と。小田切の言う〝武者主義〟とは修正されたトルストイ主義であったと見てもいいように思うがどうであろうか。結局は武者小路へのトルストイの影響は少なくても〈新しき村〉時代頃まで続いていたし、形を変え修正された影響を含めるならずっとあとまで続いていたとさえ見ることができるように思う。武者小路において、トルストイの影響が最も弱化したのはむしろ戦時期であったと筆者は考えている。周知のごとく、この時期かつての非戦論者にして平和主義者武者小路も、日本の戦争政策に賛同する立場をとらざるを余儀なくされ、時に

は積極的な戦争賛成論を述べていたのである(24)。

「白樺を出すまで」の中に、武者小路は雑誌発行の目的を、「僕は内心、トルストイ主義にかぶれた思想で世間と戦ひたい」(25)と思っていた、つまり、トルストイ主義、その思想で武装して、いわば文壇と読書界の正面突破をはかろうとの意図であり、トルストイ主義はこの段階ではまだ彼の最重要な武器としてとどまっていると見ていいのではあるまいか。つまり、雑誌『白樺』創刊の頃までは少なくても彼はトルストイの濃厚な感化のもとにあったと見ていいのではあるまいか。周知の如く、最初四〇年に予定した雑誌の創刊の理由として彼は「吾人は人間なり、そして読者諸兄も人間なり、吾人の真心より出づるものはいかで諸兄の真心に通ぜざらんやこれ吾人の敢てこの雑誌を発刊せし故なり、他に故なし」こういう言葉を用意していた（明治四〇年八月一〇日付けの志賀直哉宛の葉書、小学館全集一八巻二〇頁）。ここで冒頭からことさら人間であることを強調しているのは、公家華族という特殊な身分のために、世間から特別な目で見られがちなので、それを普通の人として交わりたい、人間同士身分は違っていても真心から出た言葉ならばお互いに通じ合えるはずだという宣言であったのだ。彼にそのように行動をとらせようとしていた主要なものは、ほかでもなくトルストイの思想であり、トルストイ主義であったと見たい。

大津山はまた、「明治大正期の彼の思想は、トルストイを軸として回転している。トルストイから離れたときでも、彼が自分の位置を測定する尺度として用いたのは、今すてて来たばかりのトルストイであった」（上掲書七二、七三頁）とも述べている。この期の武者小路の基本的な言動はまさにその通りであったのだと考える。思想や行動の指針となっているのが、トルストイであり、自己の位置を測定する物差し、つまり原器となっているのがトルストイだとしたら、まだ大枠ではトルストイの影響下にあったと言えるのではあるまいか、つまり、トルストイ離反などということは言えないのではないだろうか。この頃までの武者小路にとってはトルストイは原点であり、トルストイから少し離れてもまたトルストイに戻ってきて、自己の位置を確認し、行動していたのである。

それにもともと武者小路は本来的には独立独歩の人間であり、彼の生来の自己肯定、個人主義などといったものはトルストイの思想とは相い容れないものであった。最初からトルストイの一面だけを見てかなり無理な接近をしようとした面があったと見ることができるのである。彼がますます自己肯定を強め、個人主義を称揚し、あるいは性欲を肯定するに従い、彼はトルストイ主義からある程度離れて行くことになった。性欲を人間本来の生得的なものと肯定的に捉える自然主義が盛んな時代にあって、若い武者小路がそれを罪悪視するトルストイにしだいに反発して行ったのはごくしぜんであった。また、武者小路は「トルストイの霊と肉の区別の仕方には不服で」疑問を持っていたし、「トルストイの議論は少し自然派にとらはれすぎてはゐないか」という想いもあったのである(26)。

ともあれ、武者小路は明治末にはトルストイからある程度距離を置くようになって行ったことは事実である。明治四三年一一月、トルストイが家出してそのまま旅先で死去した時にも、彼は格別な物を書き残さなかった。異国の師の死にはそれなりの感慨はあったとろうと思われるのだが、それを示すような文章は残していない。老師の死にまつわることに関して、ただ志賀直哉宛の葉書にこう触れられているだけである。「トルストイはまだ生きてゐるらしいね。昨夜正親の処でそのことを知つた。しかし皆おそかれ早かれいるのだから写真版はつくつておいていゝと云ふことになつた。・・・」(明治四三年一一月一九日付け、小学館全集十八巻五〇頁)。これはやはり一定程度のトルストイ離れを示していたとは言えるだろう。たぶん雑誌作りに忙殺され感慨にふける余裕はなかったのかもしれないが、それにしてもあれほど心酔していた老師の最期に対しての反応としてはそっけなさするぎるような気はする。

このようにトルストイによって生きていたとも言える武者小路も、しだいにその師父に息苦しさをおぼえるようになって行ったのは事実ではある。彼は大正三年一月一日、短いエッセー「二十八歳の耶蘇」を執筆しているが、その執筆動機について『或る男』にこう書いている。「それは彼がトルストイによつて自分の現在の生活をつゞけることに心苦しさを感じさせられながら、新しい生活に入れないので、その不安をあらはすのに適当な材料だつたから」(第三

巻三四七頁）である、と。

武者小路は加藤一夫訳のトルストイの『闇に輝く光』に「強い刺激を受けた。自分はこの刺激には七八年前から随分苦しめられた。さうして今もなほその刺激に全然にはかてずにゐる」と語っている。そして、このドラマの感想についてこう述べている。「自分は今トルストイ主義に全然同感はしてゐない、ましてこのドラマの主人公ニコライの主義には賛成は出来ない。ニコライの心持には同感が出来る、否それ以上に動きのとれない処に居て年中苦しんでゐながら少しも逃げようとしない真面目な態度に尊敬を払ふ。しかしニコライの主義には同感しにくい、殊にニコライが他人に自己の良心を強ひる処には賛成出来ない。余りに道徳的で良心的で理性的だ。さうして他人の運命にたいして余りに良心的の交渉をしすぎる。（中略）／トルストイ主義の強味は人間的であり、現世的である処にあるけれども、宗教としては一個の人間の現世の運命にニコラスのやうに交渉することは弱味である、と思ふ。彼の人間に対する交渉の仕方は人間の力には許されない交渉の仕方である。彼は説教しても始まらない人に説教してゐる、さうして生えないのにきまつてゐる土地に種をまいてゐる（後略）」（『白樺時代の感想』第二三巻一九六頁）。

他人の人生や運命への干渉、たとえそれが良心的なものであっても、武者小路にはトルストイのそれは度が過ぎると思われたのである。この時の武者小路はニコラスの、つまりトルストイの宗教的な見地にも不満であった。ニコラスは来世を否定して現世に幸福を与えようとし、そうして人々に生き甲斐を感じさせ、万人を虚偽の生活から救おうとしている。「しかし余りに現世的の彼は自分をすら虚偽の生活からまぬかれしめることが出来なかつた、それをする為に第三者の現世的生活を不幸にすることを恐れすぎた為に。／こゝにニコライの宗教家としての欠点がある。こゝにニコライの矛盾があり、動きのとれない理由がある。彼は神を信じてゐたかも知れない。しかしその神は余りに現世的で、余りに他人の現世的の不幸を恐れる人情的の神だつた。自分の見る所によると本当の神はもう少し残酷な気がする」。ニコライはトルストイその人ではないが、武者小路のこの見方はそのままトルストイ自身に向けられ、「自分

がトルストイを愛し崇拝したのはその現世的な愛だ。しかし今自分がトルストイで満足が出来ないのもその点だ」と、老師はこう批判されるのであった（小学館全集第一巻五八八頁）。

武者小路にはトルストイのもの言いは強すぎる、自分の思う方へ人を進ませるようとする、人を強制しようとするところがある、という思いがあったのである。彼はトルストイよりもメーテルリンクをよしとした頃こう書いている。

「一体トルストイのものの云ひ方は（多く論文）は他人を強ひる処が強すぎる。トルストイは何時でも〝そつちへ行つてはいかん、こつちへ来なくつてはいかん〟と云つてゐるやうな気がする。しかし・・・トルストイとちがふ性格をもつてゐる今の自分は〝貴君のおつしやることはわかつてをります心算です。しかし私にはどうも貴君のいけないと云ふ道が、貴君程はつきりいけない道とは思へません。又貴君のいゝ道だと云ふ道が私には貴君程はつきりいゝ道とは思へません。私はもう少し迷つて見なければ貴君の云ふことに賛成が出来ません〟と云ひたくなる」（「今の自分とトルストイとメーテルリンク」『白樺時代の感想』第二三巻一四六頁）。これはトルストイの引力があまりに強すぎることへの反抗的な言動、それから逃れ、より正確にはそれを弱化し薄めようとする言動なのである。これはメーテルリンクや、グリンゲル、ロダン、ゲーテ、エマーソンといった前者とはいわば正反対の人たちに没頭することによって（同一四三頁）、自己の中の強すぎるトルストイ色を薄めようとした言動であったのだと見たい。それというのも、トルストイと完全に決別し最後的に脱却したいという考えは彼にはなかったと思うからである。

このように大正期に入る頃には武者小路のトルストイへの反発は強まったと思われるのだが、師たるトルストイの教えの故に苦しむというのは、それはまた逆に彼はまだこの時期ロシアの師の一定の影響下にあったということの証左とも言えるであろう。

この頃の武者小路には「トルストイ主義、社会主義は自分に重荷を負はせよう、負はせようとしてゐる」という言葉もある（第二三巻一六七頁）。これは当時の彼はトルストイ主義と同時に、社会主義にも強く引かれていたことを示

している。彼は自分の見地が社会主義にかなり近いものであること、〈新しき村〉はそれと類似点が多いことを認識していた。彼は大正一二年こういうことを言っている。改心してもブルジョアは許さないという馬鹿がいなければ、「・・・僕は社会主義に反対しようとは思はない。寧ろ自分はある処まで社会主義と同一立場にゐる。自分は西洋に生れたら社会主義者の一派に入れられたかも知れない」(「階級闘争に就て」小学館全集第四巻二〇二頁)という。しかし、他方で武者小路には、あとで見るように、社会主義とは相い容れないものもたくさんあった。だから、自分のことを「個人主義的社会主義」だと皮肉を言う者も多いだろうとも書くのである。

武者小路は大正五年二月、加藤一夫の訳本『我等は何をなすべき乎』を読み、反発していたトルストイへの想いを新たにし、『白樺』の「雑感」欄に、こう書いている。「(前略)矢張り頭がさがる。八九年前、トルストイの教に従つて生きたいと思つた気持がよみ返つてくる。師に背いた弟子が師から真心こめて説教されてゐるやうな気がする、一言もない。頭がます〳〵さがる。師は師だけのことがあると思ふ。自分が小さく、小生意気に見える。何か時々偉さうなことを言つたことが師の耳に入つたやうな耻かしさに打たれる。しかし自分は師の教へに少しのすきまでもあつたら謀反しやうと云ふ気はなくならずにゐる。しかし師はそのすきを見せない。一言は一言より本当のことを云ふ。自分が口答へしたいと思ふ処を一々見ぬいて大鉄槌を下してゐる。自分の生活の不正が今更に感じられる。その不正を如何にして自分は逃るべきか、・・・〈我等は何を為すべき乎〉を考へないではゐられない。・・・たしかにこの書はすべての人の心に洗礼を与へる」。「自分はトルストイに逢つて責められない人間になりたい心が強くする。それは望めないことのやうな気がする。このことは淋しくもあり、トルストイにたいしてすまない気もする。しかし自分が何かすればその原動力の大部分にトルストイがゐることは否めない。トルストイは自分を霊界に目ざましてくれた人だ。この感謝を自分はあまり悪く酬ひたくないと思つてゐる。／トルストイよ自分を憎まないでくれ。」(小学館全集、第三巻四九九、五〇〇頁)(27)。

これは、武者小路がはトルストイに最初に出会ってから十数年、その教えに従って生きる決意をしてから八九年立ってからの文章であるが、そこにはトルストイから離れようとして離れられないでいる現在の心境が、トルストイへの態度が率直に語られているのではあるまいか。十年前とは違い、既に新進の作家として文壇で認められている武者小路である。こうせよ、あうせよと、要求が多いトルストイから離れ、自己の考えに従い、自立的に自由に生き、活動したいと思うのは自然な欲求ではあった。これは裏を返せばそれだけトルストイの作用が強いということの証左でもあるのだ。そして、それでいてトルストイの教えはもっともで、自分でも同感なことが多いので彼には無視できないのである。トルストイの引力と反発の狭間で揺れ動いているのだが、この発言は今なおトルストイの引力の方が、その感化力の方が大きいことを示している。これはまた、トルストイから離れたように見えたときでも、つねにこの作家を気にしながら生きてきたということを示していよう。そして、いま部分部分では反発したり離れたりするが、「その原動力の大部分」、つまり自分の生き方や行動の原則的な大本はトルストイであるということを確認しているのである。

それでいて、大正五年末（発表は六年初め）、他方で彼は自分がトルストイアンであることを否定し、「トルストイアンにはなれませんし、ならうとも今は思ひません」と宣言している(28)。

しかし、筆者は武者小路の中では大正五、六年に、以前ほどではないが、相当高いトルストイ熱の高まりがもう一度あった、という印象をもっている。それは日本社会に広く見られた折からのトルストイ熱の高揚を背景にして、トルストイに関する専門誌の発行や、上記のごときトルストイ作品の再読などによってもたらされたのではないかと考えている。この時期彼はそれをうかがわせる一連のトルストイ関連の発言を残している。そして、それがほかでもなく、大正七年の新しい村の運動を実行させることになったのではないか、と。武者小路は大正六年の「雑感」でこう書いている。「自分もトルストイによつて罪悪の恐ろしさに今更目ざまされた人間だ。『闇の力』を見て、誰か赤坊を

殺すのを罪でないと云ふことが出来よう。理屈で出来ても心では出来ない。そして悔悟しない前のニキタの生活に誰か恐れを感じないでゐられよう。トルストイはそれを実に深く感じてゐた。自分はそれに深く心を打たれるものだ。／よし自分は自己をジヤスチフアイする為に又生かす為にトルストイに反抗する時があつても、トルストイの精神に愛と尊敬を持たないわけにはゆかない。殊に善にたいする涙ぐみたい程のトルストイの愛を自分は感じる時、今更にトルストイを賛美したくなる。美しい心には縁のない人間が多過ぎて、人間に愛想をつかしたくなる時、自分は数人の愛しないではゐられない天才のことを思ふ。トルストイは少くもその内の一人である」（「善と悪」小学館全集第三巻二三七頁）。

また、トルストイの人類愛の深さと尊さを論じた一文でも同じように、反抗しても最後には頭を下げることになること、賞賛せずにはいられないことを武者小路はこう述べている。トルストイは現世が物質的欲望の上に成り立っていること、金に支配されていることを憂い、それを人類愛をもってかえようとした。そうでなければ根本的には救われないことを感じていた。「・・・これは聖賢の人の癖である。少くも釈迦や耶蘇の精神である。（中略）／自分達がまだぢかには感じられない程強く、いろ〳〵のことをぴつたり感じてゐた。このことは彼のかいたものを見れば実によく感じられる。始めは反抗出来る、読まないでゐるとつい反抗したくなる、そんなにやかましく云はないでもよささうなものだと思ふ、もつと呑気にゆつたりしてゐたい気もする、そんなことを云つてゐては生きるのがいやになると思ふ時もある。実際自分は時々さう思ふ。しかし彼のかいたものを段々読んでゆくと、・・・感心しないではゐられない、反抗してゆく内に、涙ぐみたくなる、懺悔したくなる、自分の生活はなんと云つてもまちがつてゐないとは云へないと云ふ気になる。ハンブルになる、其処までは考へてはゐなかつた、なお感じてはゐなかつた、自分はよく知らずに簡単に反抗したのはわるかつた。トルストイがさう云ふのは尤もだ、その愛の前には膝づきたくなる。本当にさう云ふ風に人をさせる力をもつてゐる。その力は賛美すべきものだ。それは人の心を清め、ハンブルにする力を持つ

てゐる」(「人類的愛と現世的愛」一七、六、二〇。小学館全集第三巻二三八頁)。

トルストイが嫌になり、また反抗し、一時的に離れて行くが、何かの機会にトルストイに触れ、その精神に触れると、心が洗われたようになり、つまり浄化されたのである。自尊心の高い武者小路も〝ハンブルになる〟のだった。つまりはトルストイから離れまたトルストイに戻って来ているのであり、そして全体として見れば、それはトルストイによって生きるということであると思う。

15　トルストイ主義の軌道修正あるいは修正トルストイ主義へ

若い頃の武者小路は大いなる主観主義・利己主義を奉じていた。彼は最初の頃の雑誌『白樺』に寄稿したエッセー「〝自己の為〟及び其他」(『白樺時代の感想』に収録。この随想集は同誌の創刊から四年間の彼の著述を収録したもの)の中でにこう述べている。「かくて私は他人の主観を信ずる前に自分の主観を信ずるやうになりました。自分の主観に矛盾する他人の主観は信用しなくなりました」「かくて私は自己と云ふものを最も信用するやうになりました」(第二三巻八七頁)。自己内の欲望を、個人としての欲望、社会的動物としての欲望、人間としての欲望、動物としての欲望、地球としての欲望、物如としての欲望に分けて、「私達は耶蘇や仏陀よりもこの欲望の調和を心得てをります」(二三巻八八頁)とか、「私は仏陀のやうに〝物如の本能〟に身をまかせるだけでは満足が出来ません。耶蘇のやうに〝動物的本能〟を殺すのも惜しいのです」(八九頁)などと、いわばかなり不遜ともとれる主張をするようになるのである[29]。

武者小路は「自分は個人主義者である」とはっきり宣言し、「自分は他人の犠牲になることを欲しない。同時に他人を自分の犠牲にしようとは思わない」「自分は自分の幸福と快楽を尊重する、それと同時に他人の幸福と快楽を尊重する」(同巻二二頁)と語る。彼は「自分にとつて第一なものは自我である、自我の発展である。自我の拡大である、真

の意味に於ての自己の一生を充実させることである」（二五頁）と語り、芸術に従事するのもそのためであるという。「自分の嫌ひなことをさけるやうに、他人の嫌ひなことを強ひようとはしない」（二三頁）とも主張する。彼が自我の拡大を主張するのは自己を確立し自己を全うするために不可欠であると考えるからなのである。そして、その個人主義は自己の幸福の追求を第一とするがそのために他人を犠牲にしないという付帯条件がついているのだ。しかし自我を押し通そうとしたなら、必ずや他の人のそれと衝突するであろうし、彼の言うように、他人の犠牲や他人の嫌いなことを無理強いしないではすまされないことが多いはずである(30)。

武者小路に言わせれば、いわば彼の師格のドストエフスキーやトルストイやニーチェやロダンも自分と同じような個人主義者なのである。「自己の内に満足を求める道を歩めば、日本人に愛想をつかす理由はないやうな気がする。真の個人主義者は先づ全世界の人に愛想をつかす。しかして後全世界の人に希望を持つやうになるやうな気がする。ドストエウスキー、トルストイ、ニイチエ、ロダンなどはさう云ふ人の内の最大の気がする」（全集二三巻六三頁）。

このように武者小路のトルストイ理解はきわめて独特である、というより偏っており、独りよがりなのである。「自己の内に人類がゐるのだ。だから徹底した利己主義者は人類の不幸を我がことのやうに考へるのだ。トルストイが人類のことを思ふのは自己のことを思ふに他ならないのだ」と彼は言う。これでは、トルストイは個人主義者というよりも、当時の武者小路がそうであったように、「徹底した利己主義者」ということになるのである（「自己と人類愛」『白樺時代の感想』第二三巻一七四頁）。

しかしながら、武者小路のそのような考え方も新しき村建設の頃から変化したのではないかと思われるのである。若い頃は右に見たように、彼は盛んに自我の発揮・成長ということを主張し、自分をエゴイストと言ってはばからなかった。ところが、新しき村建設から三年目の二〇年八月には、「今の世の中は、自分のこと切り考へられない人のあつまりです」「・・・我々は今の世の中と精神的に戦ってゆく以上、他人のエゴイズムに負けるやうでは心細い話です」

とか、「不正な、エゴイスト的な他人の事をかまつてはゐらない空気は世界に満ちてゐます」とか語っているのである（「新しき村にて（対話）」『新しき村に就ての感想』第二三巻三四八頁）。共同生活は人々の協力なくしては成り立たないわけで、そこでは当然エゴイズムは最大の敵になる。

そして、エゴイストであることを堂々と宣言していた武者小路もその後半生はずいぶん考えが変わったように思うのである。彼のこのような思想的な変化は新しき村での生活の頃から顕著になったと見ることができるであろう。共通の目的をもった人たちが集まったとはいえ、考えも生活習慣も違ういろいろの人々が集まってきたのであり、そこで第一に必要なものは明らかに人々の和、調和だったからである。彼はリーダーとして何よりも人々の和を心がけねばならなかったはずである。

昭和一二、三年頃執筆した『人生論』の中ではもう個人主義もエゴイズムも称揚せず、むしろ、時代が時代だったとはいえ、個人のためにではなく、人類や国家の繁栄のために生きることを称揚しているのである。その中で彼はこう述べるのである。「・・・我等は我等個人の為に生きてゐるのではなく人類の生長の為に生きてゐる」（第二四巻八四頁）。「僕は人間の正しい欲望は出来るだけ満されるべきだと思ふが、しかしその為に他人に迷惑を与へたり、他人を不幸にしたり、他人の独立性まで傷つけないやうにするのが、礼儀である」（八八頁）。「我等は先づ協力して祖国の人々の生活を正しき基礎の上におきたい。それは正しき労働の上に生活を築きたい。他人の利己的な仕事を手つだふことによつて生活せずに、国家の繁栄、国民の生命完成の仕事の為に先づ働きたい。人間の生命の為に働きたい。正しき学問、正しき労働、正しき技術、正しき自己完成は必ず人間の為になるべきである」（第二四巻一三一頁）。彼は祖国と同胞の為に働く必要のあることを説いているが、その後では外国の人たちも同じように生活出来るようになることを希望しているのである。つまり、トルストイ的な四海同胞主義に近い考えを述べているのである。また、ここでは自己完成という言葉も何度か響いている。「それ以上、自己完成と、他人への愛や、友愛が自然に生きられるやう

になつたら、この世はずつと住みいゝ」（一三〇頁）。これまた、トルストイの主要思想の一つであったことを想起してもらうことも無駄ではないだろう。つまり、これはトルストイアン武者小路の中にはやはり、四海同胞、自己完成といったトルストイの主要思想がしっかりと根付き、生きていることを示していたのである。

大津山流に言うなら、「自然」主義によってトルストイ主義を止揚した武者小路は、この時期（大正五年頃から）、更に「人類」時代に入ることになったからである。しかし「人類」ということであれば、トルストイの〈四海同胞〉に通じるものであり、トルストイへの回帰を意味をしていると見ていいのではあるまいか。つまり、トルストイに抵抗し、トルストイ否定宣言をしたりしたが、彼は結局は又同じトルストイのもとへ帰ってきたのであった。

評伝『トルストイ』の最後の所で武者小路はトルストイについて結論的にこう書いている。「自分は彼を実に人間らしい人間と思ふ。自己を偽らない人間と思ふ。自己のことはぬかして他人のことを思ふのが、自分の幸福だと言ふ真髄を彼は真に知つてゐる」。だが、自分ぬきというところに武者小路は抵抗をおぼえる。彼には若い頃から自己の徹底化ぬきにしては何事も満足の行くようには成就しがたいという硬い信念がある。自分のことは考えないで、あるいは自己を犠牲にして、すべてを人のため世のために尽くすということは普通の人間には無理な要求のように映るのだ。「しかし自分に言はすと自己をぬかしてと言ふ処にトルストイらしさがあるが、ぬかす必要はないのではないかと思ふ。其処にトルストイ主義の無理があるやうに思ふ。トルストイ自身は、無理は実行できない男だが、末社（まつしゃ）の人人はいく分不自然になる心配がある。そのかはり、トルストイの教は、利己主義になりやすい我々を反省させる力を強くもつてゐる」（五六五、五六六頁）。

これらは、年をとり、新しき村の建設を経て、武者小路はトルストイの教えを消化し、自己のものとしてより体得し、更に独自の思想を生み出して行ったことを示していよう。もっとも、部分的には依然として同調できないところもあり、留保条件付きではあったのだ。武者小路はトルストイについてこうも述べている。「彼の言葉にも矛盾があり、

行にも矛盾があるが、其処に彼の真面目があるやうに思ふ。其処に彼の人のよさがあり、愛と同情と無邪気さと正直さと、真面目さが覗はれ、決して賤しさは覗はれない」(五六四頁)。「立派な人間らしさをもつて、権威をもつて、正直さをもつて、最後まで内心の要求によつて生きた自然人を見ることが出来る」(五六七頁)。矛盾も多いが、愛と同情と無邪気さと正直さ、そして真面目の自然人、これが武者小路のトルストイについての見方なのである。そしてこれはたぶんほとんどそっくり武者小路自身のことでもあるのだと思う。

武者小路は若くして作家としてたち、長い生涯の最後まで作家活動に従事して多数の著作を残した。しかもその上彼には美術家としての側面もある。それ故スケールの大きなこの作家の全的な把握などとても筆者の手にはおえるものではないと考え、片手落ちだとは思うが、もっぱらトルストイとの関連において本論を書き進めている次第である。ともあれ、武者小路は年をとるにつれ、昭和期にはその独自色をますます強めて行ったと考えられる。それはまさに上記のような諸特徴を備えた〈武者小路らしい武者小路〉であり、よく研究者によって〈即天即私〉〈天衣無縫〉と捉えられるところのものであり、また、それは小田切が〈武者主義〉と表現したところのものであったと思う。そしてそれはまたトルストイ主義を消化し修正して彼が到達した境地であり、その基底にはトルストイ主義も残っていたと思うのである。

注

(1) この作品は『太陽』の大正四年四月号(第二一巻第四号)に掲載されたあと、同年九月発行の『向日葵』に収録されたが、これはその「あとに」(あとがき)からの引用文である。小学館全集第二巻六七五頁参照。

(2) この作品の中の先生はまた、トルストイのように〈自己完成〉が必要であること、それこそが第一歩であることを次のよ

うに語る。自分の責務「それは、自分を正しき人間にすることです。さうして正しき人間の心が正しく私の心の内に自己の姿を見ることが出来るやうに務めることです。今の日本には正しき心をうつす鏡がありません。日本の文芸に接すると私達は其処に自己の歪にされた姿を見せられます。淋しい気がしないではゐられません。・・・」（小学館全集第二巻一八五頁）このようにここにはまた、作者の当時の文学への不満、彼がそれとは異なる文学を目指していることが示唆されていたのである。

（3）『白樺』大正六年九月、六号雑記。

（4）武者小路自身この民話について、「花咲爺」は「トルストイでもよろこびさうな話だと思つた。『花咲爺』は無抵抗主義の実行者だと思つた。最愛の犬を殺されても怒らず、その死屍をもらつてくる。やつとつくつた臼をこわされても怒らず、その灰をもらつてくる。その灰から花が咲く、面白い話だと思つた。（後略）」云々と、まさに解説している。「花咲爺に就て」小学館全集第三巻二三四頁

（5）『かちかち山』大正六年阿蘭陀書房（復刻版）一五頁。

（6）「蘆花生と私」『文学』一九五六年八月号五九頁。

（7）徳富蘆花は巡礼旅行に備後丸で明治三九年四月四日に出発している。

（8）「蘆花生と私」『文学』一九五六年八月号六〇頁。

（9）大体五、六回くらいではないかと思われる。なお、「僕の生たち」の中には、一〇度以上も訪れたと書いている。金子洋文の著書『生ける武者小路実篤』（復刻）、日本図書センター刊、一九九三年、三頁参照）

（10）『志賀直哉全集』岩波書店、第一〇巻二八一、二八四頁。

（11）『改造』大正一三年七月号、五九頁。

（12）「蘆花日記」から。前者は一九二四年六月二九日付け、後者は九月八日付けから。この部分は蘆花会の浅原健編集の『徳富蘆花夫妻日誌・関係文書草稿』一九二四（大正一三）年、第二回配本六・七月分（六ー五七頁）と第三回配本（九・一九頁）から引用させて頂いた。本草稿は未公刊であるが、手作りの私家本の形をとって発行され、本人から直接贈られたものである。

(13)「蘆花生と私」『文学』一九五六年八月号六一頁。

(14) 拙著『徳富蘆花とトルストイ』第二章「明治二十年代後半の蘆花のトルストイ受容――主に彼の『トルストイ』を中心として」を参照されたい。

(15)「トルストイの力（手紙）」『トルストイ研究』大正六年一月号、一〇頁。

(16)『トルストイ研究』大正五一一月、第三号三、四頁。

(17) 武者小路はこうも語っている、メーテルリンクをむさぼり読んで「トルストイかぶれから独立することができたのは事実であった」『思い出の人々』）小学館全集第一〇巻六五三頁。

(18) 本多秋五『「白樺」派の文学』講談社、昭和二九年、前者一〇〇頁、後者八五頁。

(19) 本多秋五「『初期白樺派文学集』解題・武者小路」（明治文学全集七六）、筑摩書房、昭和四八年、三九六頁。

(20) 小田切進「実篤〈彼の青年時代〉――トルストイ脱出から、〈武者主義〉へ」『群像』一九八六年四月（四一・四）号、二九九、三〇三頁）。

(21) 本多は、トルストイ主義からの脱却の兆候は、「・・・偽りでも、醜でも、間接にても汝を真に大にすることが出来たならば、価値があるのだ」との言葉がある明治四二年執筆の「潔の日記」、いや、自分を大きな人間にしなければならないと語っている四一年の日記の中に、それは、トルストイ主義への反旗は認められるとしている。小学館全集第一巻の解説、七二七、七三〇頁。

(22) 大津山はトルストイ時代を三七年～四〇年間の四年間とし、その時期の著作を次の一二のグループに分けている。第一、『輔仁会雑誌』の四つの感想文。三七年三月の「所感録」から三八年一二月の「如何にして世は改良せらるゝか」まで。第二、志賀直哉宛の書簡、この時期の四四通。第三、学習院邦語部で行なった演説。第四、この時期に該当する日記。第五、トルストイの論文「女と女の価値に就て」の翻訳。第六、「お目出たき人」の女主人公への慕情をうたった七篇の詩。第七、散文詩「日はのぼれり」。第八、「無生」のペンネームで書いた「連合演説会」の傍聴記。人種問題を述べた人道主義的見地の顕著な作。第九、「『お京』をよむ」（『こゝろのはな』掲載）。第一〇、『荒野』に収められた作品。第一一、小説『遺伝』（『生長する星の群』の大正一〇年一二月号に発表）。第一二、志賀直哉の『大津順吉』の重見が順吉のために書

いた手紙。

(23) なお、彼のトルストイ時代の個人主義と第二期の個人主義には違いがある、後者の場合は博愛主義や人道主義、その政治的表現としての明治的社会主義に対立するものであった、と彼は述べている。

(24) 例えば、昭和一七年五月発行の『大東亜戦争私感』(河出書房、小学館全集第一〇巻収録)には、それは明瞭に現れていよう。

(25) 小学館全集第一〇巻六〇六頁。

(26) 「トルストイに就て」『トルストイ研究』大正五年一一月、第三号四頁。

(27) 「『我等は何をなすべき乎』をよんで」『新しき村の生活』新潮社、大正七年八月、二一五、二一六、二一九頁参照。

(28) 「トルストイの力(手紙)」『トルストイ研究』大正六年一月、新年号一二頁。

(29) この頃「自分は無遠慮で我儘でエゴイストで交際へる人をのみ友達とすることが出来る」とも語っている(全集第二三巻九二頁)。

(30) 「自分の筆でする仕事」でも、自我を第一にかかげ、こう宣言している。「・・・自分にとつて第一なものは自我である、自我の発展である。自我の拡大である、真の意味に於ての自己の一生を充実させることである。・・・されば自分は遊戯的文学を好まない、自我を犠牲にしてまで文芸を愛する人を理解することは出来ない。・・・自分は生まれつき自我に執着する男である、されば自分は自我を何物の犠牲にしやうとは思はない。・・・自分が筆をとるのも実に自我の為である・・」小学館全集第一巻三四六、七頁